

散華

詩心迷ふ

言にいひてさびしきかな
もだしゐてなくさまぬかな
いづれ劣らぬまごころなれば
あはれわが筆に水ふくませて
鉢の萬年青を洗ふかな

自信

つゆふかき
あらくさなかに
まよひいりて
はつきりとさける
このあさがほよ

うつつ

湯のたぎり
心よろしも
こもりゐて
しるしばかりの
爪を剪りつゝ

又

ほとほとに
かたちくずれし
わが手はも
しるしばかりの
しこのこの爪

自責

老父死の床にあれば

ふたたびは
あれることなし
うつしよに
つかへるときよ
つひにあらぬかも

又

つれづれに
はこぶ筆なれ
みそ路のいまぞ
なほ書きなやむ
「孝行」の
文字のさびしさ……

(昭和十五年「山桜」十一月号)